

平成 28 年度国内調査事業報告書

# アートによるまちおこし

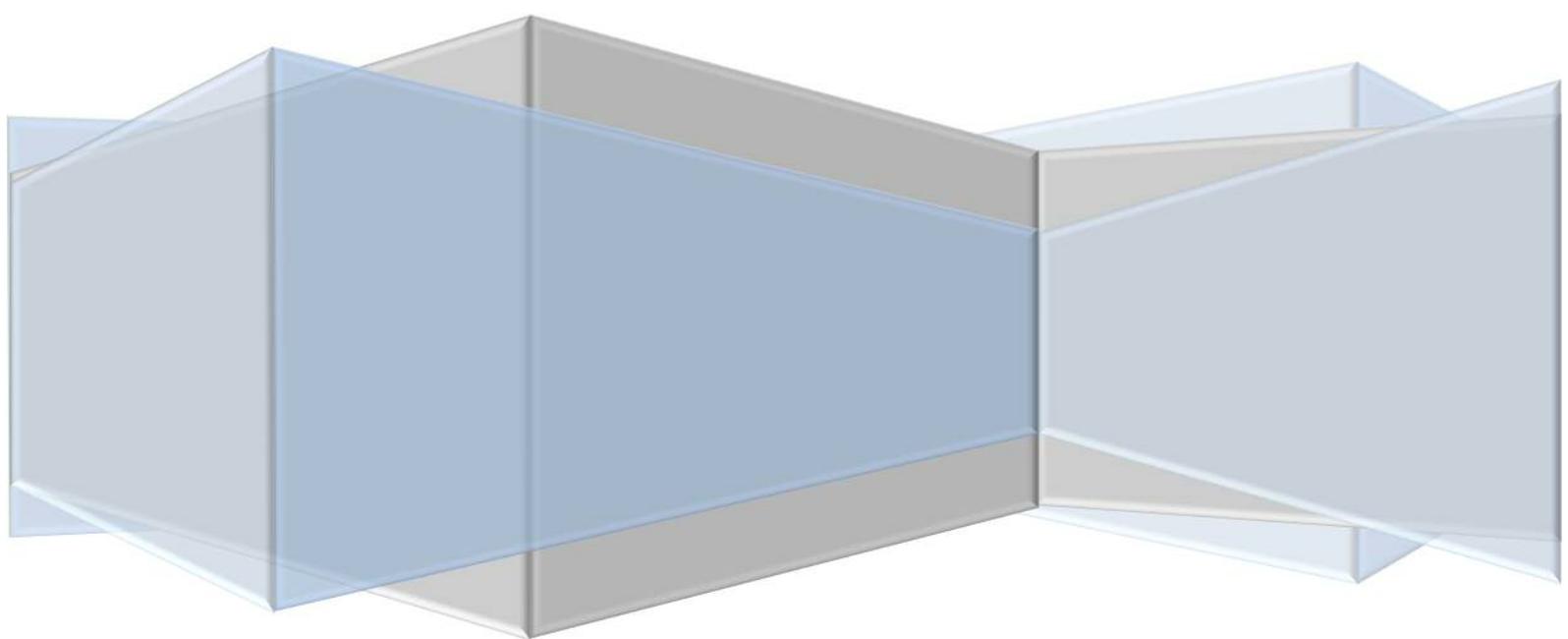
～瀬戸内国際芸術祭 2016 を事例として～

地域活性化センター クリエイティブ事業室 稲葉 淳一

川上 篤

地域支援総務課

石黒 剛



## 平成 28 年度国内調査報告

「アートによるまちおこし～瀬戸内国際芸術祭 2016 を事例として」

地域支援総務課 石黒 剛  
クリエイティブ事業室 稲葉 淳一  
川上 篤

### 1. 調査目的

現在、全国各地で芸術祭、アートによるまちおこしが盛んである。今年度も大規模な芸術祭が各地で開催されている。

その中でとりわけ実績があり注目されているのが、瀬戸内海の島々を舞台に開催される現代美術の国際芸術祭、「瀬戸内国際芸術祭」である。瀬戸内国際芸術祭は 2010 年から 3 年に 1 度開催され（トリエンナーレ）、2016 年に第 3 回目を迎えた。2013 年の第 2 回芸術祭の来場者は 100 万人を突破している。

本調査チームでは、数ある芸術祭の中でなぜ瀬戸内国際芸術祭が先進事例として扱われているのか、またどうすればアートによるまちおこしが可能なのか、さらに近年急増している外国人訪日客の芸術祭での動向について探っていききたい。

### 2. 芸術祭開催までの経緯

香川県庁舎東館（旧本館）は 1955 年に着工し 58 年に竣工した建物で、設計は建築家・丹下健三である。きっかけは、当時の香川県知事金子正則が丸亀市出身の洋画家猪熊弦一郎の紹介により丹下と知り合い「民主主義時代に相応しい庁舎を設計してほしい」と依頼したことだった。後に丹下は 1964 年に国立代々木競技場第一・第二体育館、1991 年には新東京都庁舎を建設している。戦後 10 年の時点で、香川県は世界的建築家と仕事をしていたことになる。

岡山県出身の実業家・福武總一郎氏は、1992 年香川県直島に建築家・安藤忠雄氏設計でベネッセハウス・ミュージアムを開設した。さらに 2004 年に同じく安藤氏による地中美術館を開設し、直島は「現代美術の聖地」という評価を得た。

一方、2004 年度に香川県の若手職員による政策研究『『現代アート王国かがわ』の確立』で「アートアイランド・トリエンナーレの開催」という提言がなされた。2005 年、直島福武美術館財団は「瀬戸内アートネットワーク構想」を発表し、5 年毎に複数の島々を会場とする文化芸術イベントを提唱した。続いて 2006 年度、香川県観光交流局のアートツーリズム事業で、直島と高松、小豆島、丸亀、坂出を結ぶ航路便「アートシャトル」の実験運航、2007 年香川県議会 9 月定例会で芸術祭への参画が表明された。そして 2008 年に瀬戸内国際芸術祭実行委員会設立総会が開催されるに至った。

実行委員会は、会長が浜田恵造（香川県知事）、総合プロデューサーに福武總一郎（（財）直島福武美術館財団理事長）、総合ディレクターに北川フラム（女子美術大学美術学部教授）が就任した。

### 3. 瀬戸内国際芸術祭 2010

2010年7月19日～10月31日にかけての105日間、直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港周辺を会場に、瀬戸内国際芸術祭2010「アートと海を巡る百日間の冒険」が開催された。

来場者は、30万人という見込みをはるかに超えて94万人近くに達した。また来場者の傾向としては30代までの女性の割合が顕著であった(女性68.6%、10～30代若年層70.6%)。好評を博した要因について、実行委員会は「各作品の質の高さ、海と島を会場に行われる世界で初めての国際芸術祭であること、さらには各島々の住民やこえび隊(ボランティアグループ)との心温かな交流などが都会の若い世代をはじめとする幅広い層に受け入れられたもの」と分析している。

地域別では、香川・岡山から4割となっており、海外からは台湾、アメリカ、オーストラリア、フランスが多かった。

情報発信における芸術祭公式ウェブサイトには7～10月に135の国から約98万アクセスがあり、そのうち3%(約3万件)は海外からのアクセスであった。

『総括報告』の来場者アンケート結果によると、平均滞在日数は1.96日、平均宿泊日数は1.94泊であった。そして、来場者の4分の3は芸術祭のみへの来訪であった。

島民アンケートの総合的評価では、94%が今回の芸術祭は成功だったと評価した。

### 4. 瀬戸内国際芸術祭 2013

続く2013年は、会期を春(3月20日～4月21日:33日間)・夏(7月20日～9月1日:44日間)・秋(10月5日～11月4日:31日間)に分割して来場者を分散させ、瀬戸内国際芸術祭2013「アートと島を巡る瀬戸内海の四季」として開催された。会場には、沙弥島、本島、高見島、粟島、伊吹島、宇野港周辺が新たに加わった。

来場者は、最終的に107万人に達した。来場者の傾向ではやはり女性が高く67.5%を占め、30代以下が60.1%を占めている。またリピーターが全体の32.2%を占め、ファンを獲得していることがわかる。

また香川県内への経済波及効果は、直接効果77億円、1次波及効果29億円、2次波及効果26億円を併せると132億円になるという。前回と比較すると21億円増加(前回比118%)となっており、会期では夏会期の波及効果が最も大きく全体の45%を占めている。

アンケート調査結果をみると、宿泊事業者の75%、飲食事業者及び商店街関係者の80%が芸術祭の開催効果があったと答えた。

地域活性化の事例として、男木島では芸術祭をきっかけとして帰郷を希望する世帯があり、休校中であった男木小中学校が平成26年4月から再開したことが挙げられる。

大島では、芸術関係者との交流拡大や島外からの来訪者の増加により、「大島の在り方を考える会」が設置され、大島青松園の歴史等(ハンセン病の差別問題)を後世に伝えることや、島の景観を活かした今後の在り方についての検討が始まった。

沙弥島では、プロジェクトを展開した神戸芸術工科大学と坂出市の中に包括協定が結ばれ、坂出市のまちづくりを芸術工学の観点から推進する取組が始まった。

豊島では、豊島美術館の整備を契機に地域住民と（公財）福武財団との協働で、棚田の景観維持活動が、また作品管理のための地域パトロール活動を通じた地域住民の関わりが広がるケースが出てきた。

女木島では、県内の中学生が参加した作品が野外展示されている。ちなみに女木島の別名は「鬼ヶ島」で、島の中央部に洞窟があり、鬼の人形が飾ってある。そこに中学生がつくった鬼瓦が展示されている。

小豆島では、芸術作品を地域の宝として守っていく気運や、地元自治会で作品周辺の清掃を行うなど、景観保全の取組も生まれた。アーティストの中には土地や人の魅力に惹かれ、そのまま滞在し、移住するケースもあった。

高見島では、京都精華大学の学生や教員との交流が生まれた。

来場者アンケートでは、地元（香川・岡山）以外からの来場者の平均滞在日数は 2.48 日で、宿泊者の平均宿泊数は 2 泊であった。27.3%の来場者が芸術祭以外の観光地を訪問しており、小豆島の観光地をはじめ、金刀比羅宮、栗林公園など老舗観光地への誘導につながったという。

島民アンケートから、2013 年から始まった 3 シーズンでの開催については、70.9%が適当であったと回答した。そして全体の総合評価として 84.3%が成功と回答し、83.3%が次回も開催してほしいと回答した。

## 5. 瀬戸内国際芸術祭 2016

### (1) 瀬戸内国際芸術祭 2016 春会期

2016 年 3 月 20 日～4 月 17 日の 29 日間に渡って開催された。来場者数は 254,284 人であった。来場者の動向では、女性が 67.9%を占め、30 代以下が 53.5%を占めている。この動向は前回大会と通じるもので、若い女性をターゲットにしたイベントであることがうかがえる。地域別では、香川県・岡山県で 50.2%と半数を占め、外国からの来場者は 12.6%を占めている。その内訳は、台湾(39.3%)が突出し、香港(8.4%)、中国(6.4%)と東アジア圏からの来場者が上位を占める。

また、リピーターは 39.9%と高い比率である。

香川県・岡山県内からの来場者の 9 割以上は日帰りだったが、香川県・岡山県外からの来場者の平均滞在日数は 2.3 日であった。また、57.9%が芸術祭以外の観光地訪問をしている。

また、ボランティアサポーターのこえび隊には、台湾・上海・香港・アメリカ・フランス・カナダからの参加もあり、中でも香港は 100 名以上が登録しているという。

### (2) 瀬戸内国際芸術祭 2016 夏会期

以上の経緯を踏まえ、本調査チームは夏会期の調査を行った。夏会期は 7 月 18 日～9 月

4日の49日間で開催された。調査チームは8月31日から9月4日の夏会期終盤に芸術祭を訪れた。

調査の内容は、関係者へのインタビュー、男木島のフィールドワーク、来場者へのアンケートである。

### (3) 男木島のフィールドワーク

男木島は、江戸時代は幕府天領であった。海の交通の要衝であったからだといわれている。かつて男木島では、春秋農繁期に讃岐平野に牛を出稼ぎに行かせる「借牛耕」という習慣があった。平地のない男木島では牛を飼うことで収入の道を見つけたという。

調査チームは、香川大学大学院地域マネジメント研究科教授の村山卓氏にご案内いただいた。

港で船を降りると、山の急斜面に立ち並ぶ古民家の景観が美しい。軒下を覆う石垣「オオテ」を築く方法は江戸時代のものである。まず訪れたのは、男木島灯台。島の南西部にある港から西側に沿った道を歩き、島の北端に灯台がある。総御影石づくりが特徴で、1895年に点灯して以来、備讃瀬戸を航行する船舶の安全を守っている。日本の灯台50選に選ばれ、映画『喜びも悲しみも幾歳月』の舞台でもある。現役の灯台守の方にお会いすることもできた。

島の中央の小高い周囲を見渡せる場所には、豊玉姫神社が立つ。豊玉姫は、『古事記』『日本書紀』に描かれている。海神・大綿津見神の娘で、山幸彦の夫である。豊玉姫は、鰐・龍の姿になったという海の性格を持った神で、瀬戸内海の島々に相応しく、島では安産の神様として崇高されている。

「オンバ・ファクトリー」は、会期中に島に暮らす人たちと関わりを持ちながら作品を制作している。オンバとは乳母車・押し車のことで、坂道や細い道が多い男木島では、道具を運ぶ生活必需品として活躍している。オンバ・ファクトリーではそのオンバに装飾やカラフルなペイントを施し「移動する立体作品」にしている。生活に身近な道具をそのままアートに仕立てているのである。

オギノトリコは、写真家・神戸志保氏の写真館である。神戸氏は、男木島に初めて訪れたとき島民の笑顔に魅了されたそうだ。それ以来、東京と男木島を行き来しながら島民の写真を撮り続けた。そしてついに、自ら古民家を改修して、島民の笑顔の写真がたくさん並んだ写真館をオープンするに至った。縁側からは、瀬戸内海の絶景が見渡せるようになっている。

調査チームもランチに利用させて頂いたビストロ伊織のシェフ前田雄一氏は、丸亀市出身



オンバについて説明する大島よしふみ氏

でフランス料理の技術を大阪で学び、その後高松市にUターンした。その後 2015 年に男木島に移住しビストロ伊織を開店した。店舗づくりは重機が使えないため、自ら改修した。これはオギノトリコの神戸氏とおなじで、その背景には島民のアドバイスやお手伝いがあった。ちなみにビストロ伊織の料理材料のほとんどは男木島でとれた旬の食材で、島の漁師から手に入れた魚介類や島で育てた野菜類ということだ。

福井大和・順子夫妻は、芸術祭を機に男木島へ家族で移住された。夫妻には子どもが 1 人おられたが、男木島小中学校は 2011 年春に休校となったままであり、高松市内の学校へ 40 分以上かけて通うしかない状態であった。大和氏は子どものいる友人に男木島へ一緒に移住してもらおうなどして島内の子ども数を増やし、約 900 名の署名を集めたうえで、高松市教育委員会へ男木島小中学校の再開を訴えた。その結果、2014 年 4 月から男木島小中学校は再開された。夫の大和氏に触発されるように、今度は妻の順子氏が図書館の設置に向けて活動し始めた。男木島には高松市図書館男木島分室があったものの、蔵書数は少なく、子どもたちの学びの場と住民同士が交流する場としての新たな図書館設置を目指したのである。図書館設置にあたり、築 100 年の古民家の改修工事には、香川県内の学生、近隣の島からのボランティア、男木島への観光客など約 300 名が関わる大規模なものとなった。また、蔵書や本棚の購入費を集めるため、クラウドファンディングを活用し、当初の目標額を 24 日で達成するなど、幅広い支援を得て、男木島図書館は 2016 年 2 月にオープンした。福井夫妻は、男木島に移住を検討する人たちの相談なども行っておられ、男木島ではここ数年で移住者が 38 名という非常に大きな成果を上げている。その理由について、大和氏は「男木島には簡単に住めるような家がなく、古民家の改修工事というハードルを越えなければ住むことはできない。しかし、そのハードルを越える覚悟と改修工事の過程で島民と交流し、島民のあたたかさを感じるからこそが定住につながっている」と語られた。

男木島においては、今回の芸術祭の全作品の中で唯一、瀬戸内国際芸術祭実行委員会ではなく、男木島コミュニティ協議会が所管する「アキノリウム」という作品がある。島が作品を所管することによって、島民の意向にあわせた展示方法の検討ができる。島民が主体となって芸術祭に関わっている新しい取組の 1 つである。



男木島図書館について説明する福井大和氏



山口啓介「歩く方舟」

#### (4) インバウンド観光のアンケート調査結果

夏会期中の8月31日から9月4日に、直島・豊島・男木島・女木島内で、外国人訪日客15名（男性5名・女性10名）を対象に以下のとおりアンケート調査を行った。（サンプル数は少ないが、状況の一端でも把握できればという趣旨で行った）。

##### ①どこの国から来たか？

結果：台湾8名、中国2名、オーストラリア2名、イタリア2名、ドイツ1名

やはり、『総括報告』にあるとおり台湾の来場者が多かった。一方で欧米系の訪日客も多い印象を受けた。『2016 春会期の概要』によれば、来場者全体の12.6%が外国人旅行者だが、その内、アメリカ・イギリス・フランス・ドイツ・スイスなど欧米系訪日客は全体の26.3%を占めている。

##### ②年齢は？

結果：20代9名、30代1名、40代1名、50代4名

『総括報告』では、来場者の6～7割が10代から30代であった。その傾向は外国人訪日客についても見られた。

##### ③どのようにして瀬戸内国際芸術祭を知ったか？

友人や知人から9名、インターネット8名、SNS1名

友人や知人からの口コミの影響が強いことがうかがえる。

##### ④芸術祭に来るのは何回目か？

初めて13名、2回目2名

こちらは『2016 春会期の概要』では、リピーターが約4割を占めていたが、今回のアンケートでは初めての来場者が多かった。ただし「日本」へのリピーターである可能性は高い。

##### ⑤瀬戸内エリアに何日滞在するか？

0～2日間5名、3～4日間7名、5～7日間2名、それ以上1名

『総括報告』では 1.96～2.48 日の平均滞在であったが、アンケートでは 3～4 日滞在が多かった。これは欧米系訪日客の回答結果が影響したものと考えられる。

⑥旅行形態は？

個人旅行（F I T）15 名全員

旅行会社的にも団体旅行は交通面で組みにくいということである。F I Tが多いということは、既に日本のゴールデンルートなどを訪れたリピーターである可能性は高い。

⑦この旅行で興味のあるものは何ですか？

アート 14 名、自然 12 名、日本文化 7 名、食 3 名、おもてなし 3 名

当然ながら、芸術祭の会期中に訪れているので、アートへの関心が高い。また瀬戸内の自然にも同程度に関心が高いことがうかがえる。一般的に外国人は日本の「食」に高い関心を示すが、芸術祭に訪れている外国人はそれ以上に日本文化に高い関心を示していることが特徴である。

⑧この旅行で不便に思うことは？

交通手段 7 名、Wi-Fi 環境 4 名

【自由記述欄】

「不便に思うことはない」「島の巡回バスの乗り方が難しい」「レストランが閉まるのが早い」「レストランの数が少ない」「英語のインターネットサイトが充実していない」

「交通手段については、こえび隊による誘導があり尋ねればわかったが、島内のバスは種類とルートが分かりにくいところがあった。」

⑨またこの芸術祭に参加したいか？

参加したい 14 名

【理由】

「他の島も見てみたいから」「アートと自然の風景が素晴らしい」「男木島の自然が素晴らしい」「日本と瀬戸内が大好き」「島が好きだから」「スタッフが親切」

参加したくない 1 名

【理由】

「既に 2 回参加したから」

⑩あなたが日本で好きな観光地は？（複数回答可）

京都 5 名、四国 3 名、九州 2 名、宮島 2 名、

東京 1 名、大阪 1 名、神戸 1 名、富士山 1 名、有馬温泉 1 名、男木島 1 名

東京、富士山、京都、大阪などのゴールデンルートのほか、宮島があがっている。

アートに関心がある層だけに、京都という伝統文化地の人気が高かった。

## 6. 芸術祭の効果

瀬戸内国際芸術祭実行委員会の『総括報告』では、経済効果の推計や住民アンケートをとった上で「成功」という総合評価をしている。

ここでは、調査チームが行った実際のインタビューや資料から芸術祭の効果を見ていきたい。

#### (1) 外国人旅行者の宿泊者数の増加

香川県交流推進部国際観光推進室の山口幹太氏と岡下健一郎氏に香川県全体のインバウンド観光についてうかがった。国籍別外国人延べ宿泊者数推移（観光庁）によれば、香川県の外国人宿泊者数は増加傾向にある。

芸術祭前の2009年19,980人、最初の芸術祭が開催された2010年は33,790人と増加し、東日本大震災のあった2011年は28,230人に減少、2012年33,930人、二回目の芸術祭が開催された2013年は75,010人と倍増、2014年には120,270人と更に急増し、2015年166,630人と上昇は続いている。

2009年から2010年と、2012年から2013年をみると芸術祭の効果があったとすることができる。ただ、2013年から2014年は芸術祭がないにも関わらず増加しているし（常設展示作品も多い）、そもそも日本全体のビザ緩和や免税品拡大にともなうインバウンド増加というトレンドを考慮すると、芸術祭のみに外国人の宿泊者数増加の要因を帰することは適切ではないかもしれない。

#### (2) 移住者の増加

男木島図書館の福井大和理事の話にあったとおり、瀬戸内国際芸術祭を契機にUターンが増え、休校中だった小中学校が再開した。さらに、移住希望者のマッチングも行うようになって移住者が3年で38人増えたという実績がある。

また、写真家の神戸さんが島の人たちの笑顔に魅了されたと話していたことから分かるように、男木島では「島の人たちの顔・島の人たちの暮らしが見えていた」ことが特徴的である。このような島の雰囲気、島に住む人たちの温かさが、この小さな島に移住者が増加している要因の一つではないか。

#### (3) こえび隊の広がり

『総括報告』のアンケートにもあるとおり、瀬戸内国際芸術祭の来場者案内をサポートするボランティアこえび隊の評価は、非常に高い。特に調査チームにとって印象深いのが後藤努氏である。香川県庁の職員である後藤氏は、会期期間中を通じて毎朝勤務時間前にこえび隊の活動を行っていた。毎朝、高松港で直島などに向かうフェリーに来場者を案内し見送っており、調査チームも滞在中幾度もお世話になった。

こえび隊は芸術祭を契機に結成され、その運営を成功させるというプロセスの中で、地域住民の結束は高まった。

そして、こえび隊には芸術祭に協賛している地元企業からもボランティアスタッフが参加している。お金だけの協賛に留まらず、このように実際にスタッフとして住民や行政と一緒に芸術祭を作りあげることで、住民・行政・企業が一体となったまちおこしにつなが

り、それが地域のにぎわいを創出している。

また、香川県交流推進部国際観光推進室の山口幹太氏と岡下健一郎氏によれば、香港のこえび隊の登録者数は100名を超えるということだった。今や芸術祭が単なる観光に留まらず、海外にまでファン（愛好家）を獲得しているということがうかがえる。

## 7. 課題

### (1) 企業貢献の占める大きさ

周知のとおり瀬戸内国際芸術祭は、(公財)福武財団の貢献が非常に大きい。そもそも芸術祭の中心地である直島が芸術の島として注目されだしたのも、福武総一郎氏が安藤忠雄氏に設計を依頼した地中美術館やベネッセハウス・ミュージアムの存在があった。今後も(公財)福武財団の存在が芸術祭のキーとなっていこう。しかし、今後末永く芸術祭を継続していくためには、そのみに依存しない体制もまた必要となってくるのではないか。

### (2) 来場者マナー

来場者のマナーの問題は、住民アンケートをみると「良い」という意見と「悪い」という双方の意見がうかがえる。大規模なイベントにはどうしてもつきまとう問題である。ゴミの問題、アートからアートへの移動ルートの問題、居住エリアへの制限など様々な問題を明らかにしていって、芸術祭の回を重ねるにしたがって改善策を具体化していくしかないだろう。

住民のプライバシーの確保については、香川大学の学生によるプロジェクトチームが男木島でその対策に乗り出している。島の廃材を利用し、自分たちの手作りで民家への立ち入りを規制する看板を作成し、島の各所に配置している。島の住民からも評価を得ており、こういった域学連携の取組が今後改善策として期待される。

### (3) 交通

瀬戸内海の島々を舞台とする芸術祭であるため、船や島内のバス移動などどうしても時間がかかり不便に思うところはある。しかし、こえび隊の協力が得られる限り、そういった問題はある程度緩和されていこう。

## 8. 瀬戸内国際芸術祭の成功要因

2016年も全国各地で芸術祭が行われている。

8月11日から10月23日で開催されている「あいちトリエンナーレ 2016」

9月17日から11月20日に初開催する「茨城県北芸術祭 2016」

9月24日から12月11日にこちらも初開催の「さいたまトリエンナーレ 2016」

また、来年2017年にも、

6月4日から7月30日予定「北アルプス国際芸術祭2017～信濃大町 食とアートの廻廊～」

8月4日から11月5日で予定される「横浜トリエンナーレ2017」

9月3日から10月22日予定の「奥能登国際芸術祭2017」

など、今後も大規模アートイベントの予定が続く。

地元でも芸術祭を行いたいという自治体が今後も出てくるかもしれない。しかし、どんな芸術祭でもそうだが人気が出るかどうかはやってみないとわからない。

そこで「なぜ、瀬戸内国際芸術祭はこのように人気を博したのか？」という疑問がわいてくる。

香川県交流推進部国際観光推進室の岡下氏は、「地域の昔からの文化の中に芸術が存在している。それがウケているのではないか」と述べていた。沙弥島の五十嵐靖晃「そらあみ<島巡り>」は、漁師や島の人たちとともに漁網を編むことで、人と人をつなぎ、海や島の記憶をつなぐというコンセプト作品である。ここで使われる漁師網は、まさに地元で昔からの漁師文化に根付いたものでそれをアートに再生させている。調査チームが男木島で見た「オンバ・ファクトリー」も日常的に使われているオンバ（乳母車）をアートに仕立てたものだった。

地域で芸術祭を開催するにしても、その地域に根付いたものを押し出さなければ、地域とかい離れたイベントになってしまう。アートによるまちおこしは、まず、地域に根差した歴史や文化を見つめ直すことから始めるべきだと考える。

瀬戸内国際芸術祭では、アートという一見浮世離れしたものが、その裏には地域の人や風土、文化、歴史を感じさせるような要素を盛り込んでいるからこそ、住民にも観光客にも受け入れられる芸術祭となっているのではないか。

また、現代アートが、元々その地域が持つ資源に付加価値を加えていることも地域の魅力創出の一要因になっているのではないかと考える。



草間彌生「赤いかぼちゃ」

#### 参考資料

『瀬戸内国際芸術祭 2010 総括報告』瀬戸内国際芸術祭実行委員会

『瀬戸内国際芸術祭 2013 総括報告』瀬戸内国際芸術祭実行委員会

『瀬戸内国際芸術祭 2016 春会期の概要』瀬戸内国際芸術祭実行委員会

『瀬戸内国際芸術祭 2016 公式ガイドブック』（現代企画室）

『Naoshima Insight Guide』直島インサイトガイド制作委員会

『日本の町並み』荻谷勇雅、西村幸夫

『ひらく美術-地域と人間のつながりを取り戻す』北川フラム著 ちくま書房 2015年